参考資料

第２回佐賀県総合運動場等整備基本計画検討委員会議事要旨

□開催日時：平成 28 年 7 月 11 日（月）

□出席委員：石橋委員、岸川委員、小早川委員、今委員、坂元委員、竹原委員、馬場委員、原田委員、東島委員、藤井委員

テーマ	主な意見
県有スポーツ施設のあり方	**■マーケットが寄ってくるような施設づくりが必要** 国体のためにというプロダクトアウトからマーケットイン、すなわちマーケットが寄ってくるような施設づくりをこれからはしなければならない。
	■施設の使用者、運営者を想定して整備する施設を考えることが必要 施設を整備する時点から誰が使うのか、誰が運営するのかということを考えながらやらないと、出来た時に使いづらい施設になってしまう。
	■エリア全体の経営を考えれば利益を上げることは可能になる。民間経営に移すことを検討すべき 今よりも更に求心性を持つ施設とするためには、行政が運営し続けるのは無理がある。民間へ、それから商業へ、もう少し空間を開放していくことによって、日常的にあの空間でスポーツに関するあらゆることが行うことができるようになる。その場合、建物一個一個で経営を成り立たせるのは難しいので、エリア全体としてその経営を何とかしようとする経営感覚が必要になる。
	■先進事例を参考に、収益を生むような施設を考えることが必要 ヨーロッパのサッカースタジアムは、当たり前の発想として商業施設の横に作っている。そういった先進的な事例を参考に、どうやって稼ぐのかなどを十分に考えて作る必要がある。
	■施設で収益を上げ、その収益を還元していく仕組みを検討すべき スポーツを産業として捉え、それに県が取り組むことにより、スポーツで稼いだ収益をスポーツに再投資して循環させるような形も可能になる。

テーマ	主な意見
県有スポーツ施設のあり方	**■都市戦略の中でどう施設と人材が動いていけるかが大事** 「観る」スポーツ前提の高機能整備された施設があり、それをうまく稼働させる組織と人材がいて、その人材組織が長期間の戦略に基づいてコンテンツをプロデュースしプロモートし、それが都市戦略とどうコミットさせていくのかというところまで考えていく必要がある。
	■予算面の解決が必要 これからの財政を考えると、大きなものを作って、どうやってランニングコストを生み出すかと考えると、本当に大丈夫だろうかと考えてしまう。
	■大きい施設を整備するのであれば、コスト面も含め県民の生活にどうリンクしていくのか議論が必要 県民としては、安心して暮らしていきたいという意見が多い。それは、老後や出産、子育ても含めて、安心して暮らすことができることであり、このスポーツ施設が県民が安心して暮らすことにどのようにリンクしていくのかが重要になる。
施設整備の方向性	**■「観る」スポーツの視点で整備することで、「する」スポーツに対応可能** 「観る」スポーツの視点を持って整備した施設は「する」スポーツに対応できるが、「する」スポーツの視点を持って整備した施設は「観る」スポーツへの対応は難しい。
	■総合体育館はトレセンとして整備することで重要性が高まる 総合体育館はトレセン的な空間として整備することで、その重要性が高まることなる。
	■ただ「見せる」施設ではなく、「魅せて楽しませる」施設を目指すべき 試合を見せるというのは、目で見せるだけではなくて、魅せて楽しませること。観客に「楽しんでいいただいて」初めて収益が上がるかどうかの価値が出てくる。旧態依然とした、顧客意識がない中では、よい施設はつくれない。
施設の規模	**■弱視の方の配慮も** 弱視の方も使用するとすれば、明るさや色合いというのも工夫する必要がある
	■世界大会が開催できる規模は必要ない 佐賀県で世界大会を開催することを目指す必要はないので、必要な規模を考える必要がある。

テーマ	主な意見
施設の規模	**■ターゲットをしっかり定義することが必要** Ｖリーグであれば 3,500 席でいいが、国際大会をやろうと思うとそれ以上になるなど、誘致する大会のクラスによって施設に必要な規模は変わってくる。何の試合を開催するのかをしっかり定義する必要がある。
	■施設の規模は高いレベルで作っておけば、色々なことに対応が可能 施設を考える場合に、普段は高校生しか使わないから、高いレベルに合わせて作るのはもったいないからやめておこうということがあるが、それは逆で、高いレベルの施設を作っておけば、色々なことに対応できるようになる。
	■プロリーグが開催できる規模を基準に検討が必要 現在の状況から考えると、国内のプロリーグを基準に考えていくべきである。
	■中途半端な大きさのアリーナでは、経営的に難しい 中途半端な施設を造っても、負の積み重ねになってしまう。アリーナであれば、3,000 席では経営的に難しい。ただ 5,000 席あれば必ず経営が成り立つかとなればそんなことはない。 ビッグネームのライブを誘致しても、一回の興業で 10,000～15,000 人客が入らないとペイできず、3,000 席では呼んで来ることはできない。
施設整備のイメージ	**■施設が集中することに都市空間としての魅力がある** 総合運動場や総合体育館のあるエリアの都市空間における大きい特徴は、駅の北に競技場やプール、武道場などのスポーツに関する様々な施設が複合的に１カ所に集中しているところであり、そこに都市空間としての魅力がある。
	■スポーツ施設を集中させることで求心力が増す 一つのエリアにスポーツに関する施設を集中させることによって、より求心力を増すという戦略が重要となる。スポーツと言えば、あのエリアの風景がぱっと県民に浮かぶぐらい集中度を高めていくべきである。
	■施設を集中することで特徴のあるエリアとなる 陸上、サッカー、水泳、アリーナができたとするとバレー、隣に武道場まであり、日本における人気スポーツのほとんどが１カ所に集中することになる。それだけの条件が偶然にも揃っているところは、日本全国を見てもあまりない。

テーマ	主な意見
施設整備のイメージ	**■余白の部分のデザインが重要** エリアの中にあらゆるスポーツ施設が点在するという風にイメージするのではなく、その周り、要するに余白の部分のデザインが重要になる。複数のスポーツ施設がその余白を芝生や木々やブリッジ、キャノピーみたいなもので繋いで一つの大きな風景として成立させる、そういう目線を持って整備していくことが都市空間という意味では重要になる。
	■スポーツパーク、スポーツのゾーンとしてのイメージづけが重要 スポーツパーク、スポーツのゾーンとしてのイメージづけが重要である。
	■スポーツ施設が一体的に整備された姿はわくわくする 木々があり、そこに集合したスポーツ施設が一体的にあるという施設は、想像してすごくわくわくする。そうなば、色々な方が散歩などを含めて、そこに遊びに行けるようになると素晴らしい施設となる。
	■スポーツだけでない利用、レガシーとして何を残すかを考えることが重要 総合運動場等整備基本計画検討委員会でやるべきことは、スポーツ施設のことだけを考えるのではなく、都市のアトラクションをどうつくるか、それを国体の後のレガシーとしてどう生かすかを考える必要がある。
整備内容	**■利用者にとって使いやすい、記録が出やすいような工夫が必要** 「する」スポーツの視点を持って、記録がでやすいようにトラックの硬さを固くすることや、他には無いような器具を備える、色々な使い方ができるようにプールの床を可動床にするなどの工夫が必要になる。
	■選手、関係者、観客の駐車場の確保が必要 大会が重なると車を駐車することができなくなることから、駐車場の確保が必要になる。また、選手は道具を持って来るので、出来るだけ近いところに選手用の駐車場を配置することが必要になる。
	■選手を育てるという意味で合宿の施設が必要 選手を育てるという意味での合宿のための施設が必要である。アマチュアスポーツを鍛えていくためには、県内のチームとばかり試合をしていても強くならない。県内のチームを強化していくには、県外から強いチームを連れてくる必要があり、合宿ができる施設があるといい。